

「お前がやりたいからしてるだけ」と強がる恋人を、1ヶ月寸止めし続けたらどうなるか試してみます

体験版

性欲強め腹黒大学生×素直になれない強気大学生

受け：麻佑（まゆう）

攻め：聖智（せいち）

要素：焦らし、寸止め、乳首責め、アナル舐め、中イキ、玩具、連続絶頂、フェラ

「っ、ごめ、お、俺がっ！俺が悪かったから！もういいだろ！？こんなの、いつまですんだよっ...！」

帰ってくるなり露骨なアピールをしてきた恋人を、ベッドに縛り付けて2時間が経った。でも彼が耐えたのは、今日の短い時間だけじゃない。昨日も、おととも、その前も。この1か月、ずっとずっと待てを続けてきた。

さすがに今日こそはと狙って仕掛けたところ、案の定行動を起こしてきた。でも俺は、何も分からないふりをしていじめている。イキたくて、抱いてほしくて、狂ってしまいそうな彼を。

「悪かったって、何が？これは別に、俺がしたくてしてるだけ。俺がやりたいことに麻佑が付き合ってくれてるんだから、謝る必要ないけど」

「ち、ちが...っ！あふ、っ、も、無理、限界、限界でっ」

「ん〜？いいよ、嘘つかなくても。麻佑はいつもみたいに、しぶしぶ感じてくれてんだもんね？嫌なこと、俺のために我慢してくれて偉いねえ？」

「は、あ、〜〜〜ッッッ！！？ああああっ、あ、ひ、っ、っっ...！！」

声も出せないくらいに感じているのくらい、本当は見れば分かる。許してって声に出せなくても、顔に書いてあるからそれも分かる。だけどそれを全部受け流して、ビクビク震えて痛そうな熱をなぞった。先走りで濡れまくりのここも、ローションと体液でどろどろの孔も、長い間お預けをしているから、大分欲しがりになっているらしい。

それでも俺は、彼から欲しい言葉が出てくるまでは許さない。そもそも許す義理がない。元をたどれば、麻佑が蒔いた種なんだから。コイツがああの発言を撤廃するまで、俺は絶対に折れるものか。

麻佑とのいざこざは、突発的に起こったわけではない。なるべくしてなった部分もある。もし俺に反省点があるとすれば、その時期はちょっと麻佑にがつつきすぎていた。付き合いたてで距離感をはかっていたころから少し先に進んで、お互いの家に頻繁に行き来するようになると、夜の営みの頻度も増えた。付き合ってから最初の1か月間はキスどまりだったのに、いざ半同棲生活になると隔週、週に1回、週に2回...と回数が増え、最終的に毎夜どころか週8とか、週9くらいまで行っていた気がする。

確かに、大学の授業も前期メインで取ったおかげで、後期は比較的緩く授業を受けられた恩恵はあった。その余暇を全て、セックスに捧げるのはいかななものかと思うが。でも、捧げてしまったんだから仕方がない。想像以上にエロさを加速させていった麻佑にも原因はある。

ただ、できないで言ったら可能であっても、麻佑はいきすぎたセックスが不満だったらしい。その不満を口に出してくれるのはよかったんだが、いかんせん彼の言い方に問題があった。

それは、いつものように夜に俺の家でやって、朝もやってから一緒に講義に出る流れの日。午後から始まる授業に向けて、お互い交代でシャワーを浴びた後に、急に麻佑が言ってきたのだ。

「てかさぁ...。いくら若くて盛ってるとはいえ、やっぱやりすぎじゃない、俺ら？」

「そう？でも大学では触らないようにしてるし、人目につくところではやってないから、むしろ健全だと思ってんだけど」

「健全？週7以上してて健全？」

「恋人同士ならそれくらい普通じゃない？」

「...いいや、絶対普通じゃないね。多い。100パーセント多い」

「え...。もしかして麻佑、しんどいの？」

ものぐさな麻佑は、風呂上がりに2Lペットボトルの水を直飲みしながら、げん
なりした目を向けてくる。その目には明らかにネガティブな意味合いがこもって
いたので、俺も着替える手を止めて少し考えた。

そうだよな、同じことをしているとはいえ、受け手側の麻佑の方が負担は大き
い。俺は問題なくこなせる回数も、体力が少なくて華奢な麻佑にはしんどいの
だ。そうか、毎晩毎晩イキまくっているから彼も本望だと思っていたけれど、実
は違うのかと、俺は彼を思いやってみてみたんだ。

「そ、っか...。そうだよな、麻佑って俺より飯も食わないし、ひよろひよろだ
し、体力ないもんな...。こんな毎晩してたらしんどいのか...」

「ん？おい？なんだひよろひよろって。体力もあるにはあるだろ。朝晩やりたが
るお前がイカれてんだよ、どっちかっていうと」

「いや、うん、でもこういうのはセーブできる方がした方がいいと思うし...。
俺、我慢するよ。あんまり麻佑に負担がかからないよう気を付ける」

だから麻佑のために、俺は俺にできる最大限の配慮をしようと思ったのに。彼とき
たら、はっ、と俺の発言を鼻で笑った。そして、さも無理だと言わんばかりに俺
を見下してくる。

「へ～？我慢できんだ？毎日欠かさず盛ってる聖智君が、どれくらい我慢できますかね～？」

「何その言い方。別にできるよ、我慢くらい」

「ふ～ん？まあ別に、俺は楽になるからいいんだけど。回数減るだけ助かるわ」

「...でもいいの？そんなこと言ったら、俺が拗ねて一気に回数減っちゃうかもよ。週に1回どころか、月に1回もなくなっちゃうかもよ？」

「あはは！ありえないね、そなん！絶対俺より先に、聖智の方が無理って泣きついてくるに決まってるだろ！大体、俺がしたいって言ったこと今まであったか？いつも基本的に、お前がやりたいからしてるだけ。だから俺は、月1でも平気なんだよ。やりたがりの聖智とは違うからな！」

わはは、と豪快に笑いながら、麻佑はまた水を口に含んだ後、何事もなかったかのようにクローゼットを漁った。そして置いたままになっている服一式を引っ張り出し、さっさと袖を通している。そんな彼を見ながら、俺はこっそり苛立っていた。引っかかるのは、彼の一言。

お前がやりたいからしてるだけ。

これがどうも、納得いかない。

まあ、そうだ。麻佑の言う通り、俺だけがやりたい日もあるだろう。彼が乗り気でない時、俺が求めるから答えてくれた日もあるはずだ。でも、それは10回中10回ともそうなのか？違う、絶対に違う。麻佑もやりたいと思っていた日に、俺が声をかけた日もあるはずだ。というより、本当に嫌ならもう別れている気がする。だからこの頻度に耐えうる麻佑も、結構やりたがりなはずだ。しかし彼は自

分のことを棚にあげて、俺ばかりが性欲を爆発させているような言い分じゃないか。

「おい、お前もさっさと着替えろよ。あの教授出席厳しいんだから、遅れたらやばい」

「...うん。でも全部出席さえしてれば、半分単位取ったようなもんだけど」

「それな！期末のレポート1回出すだけだし、マジ楽勝～」

俺の異変に気が付かない麻佑は、早くもスマホをいじって俺を待つだけになったようだ。だから俺も、頭の中で立てた計画を悟られないよう、普段通り振舞う。そして自分の荷物をまとめながら、買わなければならないもののリストを脳内で作っていく。

何も知らない麻佑め。見ていろよ。余裕でいられるのも数日のうちだ。今日から俺は、お前が自分の失言を認めるまで、そして撤回するまで。

麻佑のことを焦らして焦らして、頭が煮えるまで悶えさせてやるからな。

こうして俺は、一人密かに大人げない計画を立てた。しかし困ったことに、麻佑はあの日から大体1週間くらいは本当に何も気にせず過ごしていた。それを見て俺は、あれ、麻佑って俺から手を出さなければやっぱり性欲が薄いタイプだったのか？とかなり心配した。本来なら彼にも悶々としてもらって、我慢の苦痛を味

わわせる予定だったのに。なんなら、1週間ともたずに迫ってくるかと思ったのに。予想以上に、麻佑はセックスレス生活を謳歌している。

彼の想定外の穏やかさに、俺は焦った。まずい、このまま待ちの姿勢ではだめだ。自らアクションを起こさなければ、俺が先にねだることになりかねない。何か手を打つべきだと、俺は次なる作戦を考えた。

幸いにも、セックスの有無で俺たちの関係にヒビは入らず、お互いの家を行き来する状況は続いていた。大学生の一人暮らしの家に、当然だがベッドが2つもあるわけではない。寝ると言ったら同じベッドになるので、ここで麻佑にちょっかいをかけることにした。

「麻佑、もうちょいベッドの端に寄って」

「ん〜」

先に風呂に入って、ベッドの上でくつろぐ麻佑は、寝返りをうって壁がある方に転がる。彼が移動してできたスペースに体を滑り込ませて、俺は電気を薄暗くした。寝る準備が整うと、麻佑はいじっていたスマホを枕元に置き、俺に抱きついてくる。

「明日朝早いからだるいなあ」

「バイトだっけ？」

「そう、時給いいから勢いで入れるって言ったけど、普通にしんどい」

半分まどろみに入る麻佑は、警戒心もなく俺に近づく。1週間前の彼だったら、今日はすんの？と必ず聞いていたのに。ずいぶんとガードが緩くなったものだと思う。なんでこんなに無防備な彼にかぶりつけないのか疑問だけれど、よく考えたら触れることはできる。最後までいかなければいいだけだ。

だから俺は、目を閉じた彼のシャツの中に手をもぐりこませた。そのまま背中や腰を、優しく撫でる。さわ、さわ、と時に前にも回る手は、じゃれあいのスキンシップとは少し異なっていた。

「っ、ん、ん...！？聖智、ちょ、俺寝るって」

「うん」

明日彼が早朝バイトなのは知っていたし、本気で寝たいと思っているのも知っていた。だから制止の声がかかるのも読めている。でもきっと彼は、こうなった俺は止まらなないと予想して、覚悟を決めるだろう。そうしておそらく、勝手に思考が傾くはずだ。

すう、と背中の筋に沿うように撫で上げると、ゾクゾクと腰を震わせる。ゆっくりとズボンの下に手を入れたとき、麻佑の熱が膨らみ始めていた。彼の変化には気づいたけれど、俺は麻佑に期待を高めた上で、あえて理性的に振舞ってみる。

「明日早いよね。ごめん、今日はこれで終わりにする」

「っ、え？」

「おやすみ麻佑、バイト頑張ってるね」

「え...。お、おう、おやすみ...？」

今までの俺なら、やめろと言われても1回はしていたはずだ。だから、ちょっとしたお触りで終わったことに、麻佑の方が驚いていた。腕の中にいる彼が、脳内に多数のクエスチョンマークを浮かべている様子がありありと分かる。それでもこの日は、確かに俺も朝早いし、聖智も気遣ってくれたのかな？と思ったのか、無理やり納得させて眠りに入ったようだ。

ただ、全く同じようなことを3日も4日も連続して行えば、さすがの麻佑も異変に気が付く。何よりお互い次の日の予定がない夜なんて、じゃあこれで手を離したら、麻佑が嘆いたぐらいだ。

「...うん、満足した。それじゃ麻佑、おやす——」

「ちょ、ちょっと待てよ！今日も終わり！？」

もっと触れとねだるように、彼が俺に抱きついてくる。薄暗い部屋の中でも、麻佑の顔が真っ赤なのが分かった。言われてみれば、大体2週間ほどしていない。麻佑自身も、そろそろきつくなってきた頃合いだろう。

では、お触りだけはやめにして、もう少し踏み込んだスキンシップをしてあげてもいい。そう思った俺は、彼を抱き寄せて、ゆっくりキスをした。行っけますやおかえりのタイミングで軽いものはしていたけれど、舌を入れる深いキスはご無沙汰だ。露骨なエロさを含むキスに、麻佑は瞬間的にとろけていく。

「んふ...っ！ふ、う、うう、んっ」

すり、すり、と俺に腰を擦りつけているのは無意識だろうか。スウェット越しでも、彼の熱が固くなっているのを感じる。律儀に抜いてもいないのだとしたら、麻佑の切なさはいくらも計り知れない。その健気さに免じて、今日はもう少しサービスをしてやってもいい気がした。

ぐ、と腰を引き寄せて、キスしながら太ももで彼の股間を押す。むに、と当てるのは、膨張した熱。ふ、ふ、と息が荒くなる麻佑は、俺の服を握りしめて高まっている。

「ん、あ、あっ...！ふ、う、ううんっ！は、あ、ああ...！」

口を離して彼を見れば、既に出来上がった顔をしていた。眉を下げて、だらしなく口を開いて、物欲しそうに俺を見つめている。

でも、今日はここまでだ。麻佑が上手に欲しがってくれれば続きをしてあげることが、俺からは手を出さない。

「疲れてるのにありがとね、麻佑。俺、今日はこれで大丈夫」

「っ、は...！？だ、大丈夫って、まさか」

「うん、しないよ？麻佑の負担になっちゃうの、俺は嫌だからさ」

にこりと笑って足を引くと、俺の気遣いとは真逆に、麻佑は顔を歪ませた。服を握っていた手も、心なしか震えている。なんでやめるんだ、もっとしろよと言いたげな目だけれど、俺は彼の額にキスをして、優しく首を撫でる。

もしもこのタイミングで、俺が一言でも、どうしたのと聞けば。彼は気持ちを漏らすチャンスを活かして、ほしいと言えるだろう。そのくらいの素直さはある。だから、あえて聞かない。無言で撫でるだけの俺に、麻佑は何も言えずに震えていた。

「っ、聖智...」

「なあに？」

「あ、お、俺...！」

この先を求めていいか迷う麻佑は、はく、はく、と口を動かしていた。それを急かさずに待ってはみたけれど、踏ん切りがつかない彼は、とうとう口を閉じてしまった。そのまま、絶対に嘘だと分かるのに、なんでもないと言って俺の胸に顔をうずめてくる。そんないじらしい仕草をする頭上で、俺がどんな顔をしているか、麻佑は気づかない。だから彼はしばらく悶々としていたようだけれど、結局無理やり眠りについたようだ。その様子を全て眺めてから、計画が順調に進んでいることにほくそ笑む。

麻佑も大分焦れてきている。今日なんて、あと一步で欲しいと言ってくれそうだった。これは来週くらいには限界が来るんじゃないかと、少々期待を込めて俺も眠りについた。

ただ、我慢生活3週間目に入ると、麻佑を焦らす弊害も出てきた。まず、俺がしんどい。なんせ、目の前にあるご馳走をずっと口に入れられずにいる。見えていないならまだしも、見えるし手も届くのにな。このままだと飢えて死ぬ。どうか早く麻佑が折れますようにと願わずにはいられない。

そしてさらなる問題として浮上したのが、麻佑の色気暴走問題だ。普段よりぼんやりしている時が増えたとし、テレビを見ている最中、いじいじと手のひらに絡む指がエロい。控え目なお誘いを含んだ目線を四六時中浴びせられるのは、今の俺にとって拷問に近い。

「麻佑...、大学にいるときは触らないって」

「あ...？ん、悪い...」

そしてとうとう、焦らし過ぎてアピールタイムが外でも出てくるようになった。ベンチに座る時の距離は近すぎるし、講義中も太ももをさすってきたりする。外、特に大学にいる間はスキンシップをしない約束をしたのは、麻佑の方なのに。それすら忘れてしまうほど、自制が効かなくなっているらしい。これ、バイト先とかサークルに出ているときもこんな感じなのか？変な奴に目をつけられないか心配だと、こっそり頭を抱えている。

だが、俺は決めたんだ。麻佑が入れてと言うまでは、セックスをしないと。だから麻佑に欲しいと言わせるために、俺はもっと踏み込んだスキンシップを取り入れることにした。

彼の悶々の原因としては、やはり欲求不満があげられる。そうなるように俺から仕掛けているのだから当然だ。なのでこれからは彼を焦らしつつ、少しでも性欲を発散させてあげようと思う。

大学で二人きりになった時、今日の夜、俺の家来るよね？と腰を撫でながら聞いてやったので、もう麻佑はすっかりその気になっているはずだ。その期待に、半分応えて半分裏切ろうじゃないか。

バイトから帰ると、麻佑が先に俺の家到了。なんでもないって顔をしておかえりと言っていたけれど、風呂に入って準備万端なのも、なんとなくそわそわしているのも丸わかりだ。だから俺はわざとシャワーも浴びないまま、ローテーブルの前で胡坐をかいてテレビを見る麻佑に、後ろから抱きついた。

「わっ！？な、なんだいきなり」

「麻佑、いい匂いする」

「そう...？シャンプーとかは同じやつだと思うけど」

「ううん、なんかそういうのじゃない。美味しそうな感じ」

「ひゃうっ！？」

どこか期待しつつも、普段通りを装う彼にスイッチを入れるため、俺は麻佑のうなじを舐めた。そのまま緩いスウェットの隙間から手を入れて、腹から胸にむかって撫で上げていく。

こういう、明らかにそういう事に及ぶ雰囲気になったら、今までの麻佑は多少は嫌がるそぶりを見せていた。でも今日、積極的なのはむしろ麻佑の方だ。俺の手を服の上から握ったかと思うと、あえて自分の乳首に指が当たるように位置を調整している。

「ッ、聖智...！な、ここ、触って...？」

振り返って声をかけてきた麻佑は、目を真っ赤にうるませて、吐息交じりに言ってきた。彼の方からおねだりをしてくるなんて、今までになかったのに。3週間

以上焦らしたせいで俺もかなりきついが、デメリットばかりじゃないらしい。なるほど、麻佑ってセックスの時、本当は乳首も触ってほしかったんだと、新しい発見があった。

彼の要望通り、軽い力で乳首をなぞった。それは本当に、ずっと上をかすめるくらいささやかなもの。でも麻佑は小さな刺激を敏感に感じ取って、ぐんと胸を反らした。

「あふ、ううんッ！」

びくっと反応を見せる彼は、既に俺を見ていない。服の内側にある、俺の指に釘付けだ。だから布の内側で、くにくにと人差し指で上下にこねてやると、麻佑は自分の片手を口に当てて、声を殺して喘ぎ始めた。

「ふ、っ、んんっ！ふうっ、んゝ、んっ、ひ、ッ、〜〜〜っっ！」

ちなみに彼が声を抑えているのは、俺に聞かれるのが恥ずかしいからではなく、もっと対外的な意味合いが強い。一度近くの部屋からそういう声が駄々もれになっているのを聞いてしまった麻佑は、それ以来俺の家でするときは、なるべく声を控えるようになった。

時々ホテルでするときはもっと大胆に声を出してくれるけれど、俺はこの、抑え気味な麻佑の声もエロくて好きだ。いっぱいいいっぱいなのをどうにか堪えている感じが興奮するし、時々我慢しきれずに出てきた声を聞くと、それだけで征服欲が満たされる。

「んふ、っ、っん、んんう」

「乳首好き？もっとする？」

「っ、っっ...！」

熱に侵されている麻佑は、俺の問いに素直にうなずいた。しかも一回ではなく、何度も。こくこくと首を振る彼の耳の裏にキスをしてから、両手を服の中に滑らせる。

ふにふにと肉付きの薄い胸全体を揉んでから、ゆっくりと胸の中心に指を向かわせた。そこからくるくると乳輪をなぞって、ぎりぎりまで期待を高めてから、きゅっと淡くつまむ。ぞくん、と震える背中がかわいらしい。きゅ、きゅ、と連続でつまんでから、かりかりと甘く引っかくと、スウェットの上からでも彼の熱が高ぶっているのが分かるようになった。

「う、ん、んゝ ～～ッ！っん、ふ、ふ、あ、聖智、それ、それ好きい...！」

「今日の麻佑、すごい敏感。このまま胸だけでイケるかもね」

「はう、ッ、そ、な、やだ、触って、下もしてっ」

「もうちょっと頑張ろ？」

「ひうううっ！！？」

長期間の焦らしが効いているのか、麻佑の身体は驚くほど敏感だった。乳首だけでイケるかも、というのは言葉遊びの一環ではなく、現実味を帯びている。今日

は1回くらい抜いてあげてもいいと思っていたから、せっかくなので乳首でイカせよう。

きゅうう、と長めにつねったら、麻佑はビクンと身体を弾ませて、次は俺から逃げるように身体をひねり出した。しかも、やだ、やだ、と言いながら、へなりと床に倒れこんでいく。

「あ、ま、待って聖智っ！やばい、俺ほんとに今...！」

「どしたの麻佑。触って欲しいんでしょ、乳首」

「っ、いい、乳首はもういい！て、てかお前も溜まってんだろ？いいってもう、こういう中途半端なのはさ」

俺から離れようと必死な麻佑は、手を後ろについて、座りながら後ろに後退していく。でも狭い部屋での移動範囲は限られているから、ほんの1歩で彼に追いついた。

待って、と制止をかける声を無視して、麻佑に覆いかぶさる。そのまま上着をめくりあげて、つんと主張した飾りに吸い付いた。ちゅく、ちゅく、と押し倒した荒々しさとは真逆に優しく吸い上げると、麻佑は俺を膝で挟んで、両手を口に当てていた。

「はう、う、んうううっ！！ふ、うう、んん、ッ、っうう！」

ぎゅう、と挟む足の力は結構強い。多分、それだけ麻佑が感じている証拠なのだろう。感じすぎて余裕がないのか、彼は身体を左右にひねって俺の口から逃げよ

うとしていた。それを追いかけて、抱きしめて、反対の乳首もつまんだりして、
どんどん麻佑を追い込む。

「んんんううっ！！ふぐっ、う、うゝ ～～～...ッッ！っひ、う、ううう、ん、
ンンゝ っ！」

徐々に、麻佑の声にも余裕がなくなってきた。ちらりと目だけを上に向けて彼の
ことを見ると、ぶんぶん首を振って何かから逃げようとしている様子が見えた。
だから俺はあえて彼の両手を外して、自分の口で代わりに麻佑の声を吸い取る。
そのまま強く乳首をつまむと、ガクンと麻佑の腰が上に跳ね上がった。

「～～～っ、ン、ふ————.....っっっ！！！！う、っ、ッッ！！？」

がく、がく、と何度か同じ動きを繰り返してから、ぱたりと彼の腰が床に落ちて
いった。動きが落ち着いてから麻佑の下半身を見ると、薄いグレーのスウェット
の中心だけが濃く色づいている。

「イっちゃったね、麻佑。ここ、ぐちゃぐちゃになってる」

「あふ...っ！」

ただ、俺は今日これ以上手を出すつもりはない。だから戯れ半分に濡れた場所を
触っても、それから先はないので、すっと手を離れた。

「お風呂入ったのに汚れちゃったね。俺もシャワー浴びたいし、一緒に入っちゃおうか」

「ん...？う、うん...？」

麻佑は俺がそう言うと、若干疑問はあるようだったけれど、大人しく一緒に風呂場についてきた。多分彼は、お風呂か、上がった後に続きをする体についてきたんだと思う。でも俺が本当に手を出さないまま眠りにつこうとしたので、ぎょっとして俺に縋ってきた。

「さ、じゃあ明日は小テストもあるし。早めに寝ておこうね」

「...は？ね、寝んの？このまま？」

「このままって何？いつもと一緒にだよ？」

「や...！い、一緒じゃ、なくね？だって、だっていつもは」

「うん、いつもは？」

一応一回出したとはいえ、乳首イキ止まりの麻佑はスッキリしていないだろう。だから当然、する気満々だったはずだ。俺も麻佑にそうなってもらうのを期待していたので、彼の口から求めている台詞が出てくるのを待つ。

けれど残念ながら、今日もあと一押しが足りなかったらしい。途中までいい線を行っていたのに、麻佑が途中で自分からセックスをねだっていると気づいて、口をつぐんでしまった。それでも辛抱強く待ってみたけれど、麻佑はしゅんと肩をすくめて、俺に抱きついて終わった。

「...やっぱ、なんでもない。早く寝よ」

「そう？そしたら麻佑、おやすみ」

ちゅ、とつむじにキスをしたとき、麻佑はすんと鼻をすすっていた。なんだか俺が好きな子をいじめているみたいで忍びない。でも、元はと言えば麻佑が悪い。

「お前がやりたいからしてるだけ」と言ってきたのは彼だ。だから俺だけじゃなくて、本当は麻佑もしたいのだと口にしてくれるまでは、こちらが折れるわけにはいかない。

けれど、彼が早々に理性を焼き切ってくれないと、いつかは俺の下半身が暴走してしまいそうだ。できれば一日でも早く降参してほしい。そう切に願ったのに、願いは彼に通じなかった。

変なイカセ方をした翌日からは、逆に麻佑の色気が増してしまった。寝起きの段階でじっとこちらを見つめてくる目線からして、ヤバさが暴走している。さらには、大学に来ても緩い雰囲気直らないのも困りものだ。無防備に人を誘う空気感は見ているこっちがハラハラするほどだった。たまたま別授業で他の友人と歩いている麻佑の顔を見て、俺が頭を抱えてしまうくらい状況は良くない。

ほんの少し性欲を発散させてやるつもりだったのに、逆効果になってしまった。

変に甘やかしたことで、麻佑が内側に抑えていたものが外に出てきてしまっている。きっと本人には自覚がないから、こればかりは言っても直らないだろう。

心配ならさっさとセックスしてしまえばいい話でもあるが、もうかれこれ4週間を超えてねばっている。長期戦の末、ここで俺が負けるのは癪だ。だから今日は、本気の追い込みをかけることにする。一刻も早く、麻佑を落としにかかったほうがいい。

やると決めてからは、麻佑にすぐメッセージを送った。今日の夜、彼の家に行くことだけを伝えておく。今晚は彼がバイトの日なので、俺が先に彼の家に入っておける。この時間で色々と準備を整えておこうじゃないか。

何も知らない麻佑は、大学とアルバイトの疲労をにじませて帰宅してきた。そんな彼がシャワーを浴びてからが勝負だ。

「麻佑、こっちきて」

風呂上がりの彼に向って、座ったまま両手を広げる。そんな俺に対して、麻佑は一瞬きょとんと首を傾げた。しかしすぐに合点がいった彼は、ふふんと得意げな笑みを浮かべる。

「なに？今日は補給日なん？」

「だって大学にいるときは、授業違うからあんまり一緒にいられなかったし」

「甘えたですねえ聖智君は。まあいいや、存分に補給しろよ」

構えた様子もなく俺の腕の中におさまる彼は、もともと俺を甘やかすのが好きだ。もちろん自分が甘える行為も容赦なく行うが、頼られるのは悪い気がしないらしい。だから疲れていても、俺が甘えたがったら気分よくこちらにくるのは読めていた。

これで、捕獲完了だ。これからは彼の身体をまさぐりまくって、酷なくらい追いつめていこうと思う。ちらりと、棚に置かれた時計に目をやる。時間はちょうどいい。さあ、悶々してもらおうかと、まずは彼のうなじに吸い付いた。

「ん、ふふ、くすぐったい」

まだ笑ってられる彼は、これから自分に起こることが全く予想できていないようだ。せいぜい今だけは余裕ぶっていたらいいさと、俺は服の上から彼の身体を撫でた。

それから、約30分。じっくりじっくり、全身を撫でて撫でて撫でまくった。明らかにじゃれあいにしては濃く、長い。際どいところは特に念入りに撫でた。その結果、麻佑はすっかり敏感に仕上がったようだ。それは彼も感じているようで、びく、びく、と軽く身体を弾ませながら、もじもじと俺の上で身じろぎする。

「んは、あ、あ、聖智...！な、も、もういい...？」

「だめ、まだ麻佑不足」

「んん...！」

ひぐ、と大人しく声を詰めているのは、彼なりのプライドだ。まさかただ撫でられているだけで、ガチガチに勃起していると知られたくないのだろう。もちろん俺には筒抜けだが、まだそこは触らない。太ももや足の付け根を撫でて、期待を高める。

「ふ、ふっ、ッ、ひ、う...！」

「麻佑、キスしょ」

「っ、んう、んん、んんんう！」

俺と正面に向き合う格好で座りなおした麻佑と、深い口づけを重ねた。お尻や腰のあたりを撫でても、ゾクゾク、ゾクゾクと全身を震わせる麻佑は、既に限界が近いだろう。あえてお尻の谷間に沿うように指の背を滑らせたら、首に巻きついた腕に強く力が入った。期待感を隠し切れない彼は、口を離すと真っ赤な顔で俺を見つめていた。

「あ、あ、聖智、聖智い…」

ぐい、ぐい、と腰を振って、俺の腹に自分の熱を押し付けてくる。さすがにじれったそうなので、布越しに高ぶりをなぞってみた。すると、くうんと鳴く麻佑の声が聞こえる。

「はあ、んっ、それ、もっと、もっとお」

もう俺が触るというより、俺の手に麻佑が自分で擦りつけていると言った方が正しかった。我慢できない麻佑は、自ら下を脱ぎ始めている。でも、彼だけが欲求を発散させるのは何か違う気がしたので、俺は乳首を弄って脱衣の邪魔をした。

「ひゃ！？あ、や、ちょ、ッ！？ま、まて聖智、乳首やら、あ、あっ！」

服をがばりとめくりあげて、内側に潜む乳首を口に含む。しっかりと抱き寄せたので、麻佑が嫌がっても逃がさない。だが、ここで焦りは厳禁だ。性急な責め方

はしない。はむ、はむ、と唇で淡く挟んでから、優しく舌先でなぞる。チロチロと少し早く舐めると、力が抜けた麻佑は、俺の頭を抱えて動けなくなってしまった。

「ふああああ...ッ！あ、きもち、聖智、それ、それ気持ちいい」

「ん、いいよ、もっと舐めてあげる。でもいいの？全然服脱げてないけど」

「や、だって、こんなんされたら、脱げない」

「じゃあずっと、ここは窮屈なままか」

「はふ...ッッ！！？」

だけれど俺の頭に手を置いてしまったら、麻佑のズボンは下せないままだ。だから彼をもっと切なくするために、わざとズボンの中に手を入れて、下着の上から少しだけ熱を撫でた。つつ、つつ、と軽く2回。それから発破をかけるように、ぱちんと下着のゴムを摘まんで離す。

「ほら、頑張れ麻佑。自分で脱げたら触ってあげるよ？」

「っ、ん、んん...！は、あうううっ！！」

最近はその下半身に触れないことも多かったから、久々にセックスに行きつく流れを悟った麻佑は、目の色を変えてズボンと下着に手をかけた。でも簡単におろせては面白くないので、俺も乳首をいじめて時間を稼ぐ。

じゅう、と吸い付くと、だめ、と言って腰を落とす麻佑がかわいらしい。何とか腰を上げるけれど、小刻みに舌で乳首を弾かれるせいで、がくがくと太ももが揺

れている。ひ、ひっ、と耳の横で聞こえる麻佑の声は、感じているのにどこかもどかしそうだ。膨らんだ熱を持て余す、彼の葛藤がうかがえる。脱ぎたいのに、脱げない。でも気持ちいい、もっとしてほしい、下も触ってほしいと、様々な欲求が渦巻いていそうだ。

けれど、いつまでもいじめていてはかわいそうだ。なので時々口を休めてチャンスを作ると、何度目かの挑戦で、麻佑はズボンと下着を膝までおろすことができた。それを俺がほめる前に、麻佑は俺にキスをして先をねだってくる。

「んあ、あ、んっ、聖智、ね、脱いだから...！早くっ、早く触れよお...！」

前もそうだったが、麻佑のおねだりは貴重だ。あとは、言い方もこれまでとは少し違う。具体的にされたいことを言わずに、早くしろ、さっさとしろ、とは言われていたけれど、俺の手を握って自分の熱に導き、触れと言うなんて初めてのことじゃないか。

随分大胆なことも言えるようになったかと、彼の頭を撫でる。ただし、いつもならともかく、我慢期間の俺に対しては効果が薄い。その程度のおねだりでは、俺は今日の計画を取りやめにはしない。

「ここ触ってほしい？」

「い、いちいち、聞くなっ！早くしろっ！」

それに、やはり問い詰めたら答えをばかすのは相変わらずだ。まだまだ身に染みていないようなので、本当は自分が欲しがっている立場なのだと分からせてやる必要がある。

撫でたり、なぞったりしかしていないはずの彼の熱は、既に床に滴るほど先走りが滲んでいた。くりくりと指先で雫を垂らす穴をいじると、指の隙間からじゅわりと液体があふれてくる。へなりと腰が沈みそうになる麻佑を支えながら、高ぶりを包み、まずはゆっくりと上下に擦る。

「ふぁ、あ、ん、んん...！っ、聖智、も、っと、強く」

「焦らないの。ちゃんとしてあげるから」

「んんう...！」

服さえ脱げればたくさん触ってもらえると期待した麻佑が、物足りない刺激に焦れていた。苦しそうに俺の肩を掴んで膝立ちになる姿は、一生懸命な感じがあっ
ていい。自分の目の前でひくんと腹が動いて、連動して熱も跳ねる。素直な身体は、早くイキたいと嘆いているようだ。

だが、俺はあえていきなり手を早く動かして、動揺する彼が息を詰めた瞬間に手を止めた。それから少しの間、腰を撫でたり、乳首の横にキスをしたりして時間をつぶす。

「はひ...ッ！！？え、あ、あゝう...！！？ん、え、え...っ！？」

何が起こっているのか分からず、麻佑は完全においていかれていた。そんな麻佑に詳しい説明を与えず、俺はもう一度素早く手を動かす。一旦は落ち着いていた麻佑の熱は、再び強い刺激が与えられたことで、一気に射精へと向かっていった。

けれど俺は、またそこで手を止める。

「ひ、ああ、あっ、あゝ、いい、イク、イツ、イクイク、ツ、え———……
っっ！！！！？」

ぱっと離れた手を見た麻佑は、絶望的な顔で下腹部に目をやっていた。何をしているんだ、なんでやめたんだと、非難のこもった目で俺を睨む。

「なん...っ！お、お前わざとっ」

「麻佑」

「な、なにっ、ツ、ふ、んんっ、んんん！？」

俺の意図に気づいた麻佑は、まだ回る頭で機転をきかせようとしていた。これは良くないと思った俺は、彼が何かしらの行動に出る前にキスをしながら麻佑を押し倒す。もがく彼を転がしてうつ伏せにして、それでも伸びてくる手を握って、余計な場所に触れるのを阻止した。それから目の前にあるお尻に顔をうずめて、最近放置気味だった穴に舌を伸ばす。

「ふは...！あ、ああ、ああっ！」

ぬち、と谷間をよけて滑り込んだ舌先で、まずは孔の入り口をくすぐる。ひくひく、と収縮するさまがエロくて、我慢できずにそのまま中まで舌を進めてしまった。久方ぶりの直接的な刺激に、麻佑は大いに喜んで腰を振っている。

「ひう、あ、っ、聖智い...！これ、はずかし、ッ、ううん！」

「恥ずかしくないでしょ？こんな腰揺らして感じてるのに」

「んうう...！あ、は、は、っんん！」

へこ、へこ、と不自由な体を上下に揺らして、彼は快感を得ていた。ただ、途中でそれがこっそり床オナをしているしぐさであるとも気づいたので、体勢を変えた。俺が我慢しているというのに、自分だけイこうだなんて許しがたい。ずる賢い麻佑にはお仕置きが必要だと思う。

「ちょっと麻佑。今、俺に内緒で床に擦ってたでしょ。自分だけイク気？それ、なんかずるくない？」

「ず、ずるって、俺は別にっ」

「床オナ禁止ね。はい、上向きになるよ」

「ちょ、まて、俺まだイッてないからノーカンじゃ」

「つべこべ言わない」

ごろりと麻佑の身体を反転させて、今度は仰向けで寝させる。放っておくと空いた手で悪戯をしそうなので、腕は握って手の自由は封じておく。それからハガラ

空きの熱と乳首が責め放題だったので、まずは濡れそぼった熱から舐めることにした。

「あふ...ッ！！ん、んんううう...！は、は、あああう！！」

けれど一点不満があるとする、焦らし過ぎの結果、麻佑は軽く舐めただけですぐにイキそうになっていた。ほとんど刺激するまでもなく限界を迎えそうになっている。ちゅ、ちゅ、と先端に口づけをするだけでも、ビクンと腰を浮かせている彼は、むしろ見ていてかわいそうなくらいだ。

「んはああ...！ああ、う、ううう`う`...！」

射精一步手前で焦らされ続ける麻佑は、徐々に若干獣めいた声を出し始めた。そんな彼を見て、慈悲を抱かないわけではない。お互い意地を張るのはやめにし、さっさとやってしまってもいいのではとも思う。でも、俺は耐えた。というより、今も耐えている。この努力を棒に振るわけにはいかない。麻佑が求めるまで待つと決めた、俺のプライドバトルでもあるのだから。

引くに引けない状況の俺は、それから麻佑を焦らし続けた。もう無理、イキたいと泣く麻佑を無視し、イク寸前で舌も指も止める。乳首イキの寸前までも持っていた時には、先日乳首ではイケた記憶がある分余計に辛かったようだ。

「ひうう！んはあ、あ、も、イク、ああああイクイクイツ、あ、う、~~~~
~ッッ！！？や、何、なんでっ！！！」

「麻佑、暴れすぎだよ」

「だ、って、だってええっ！！なんでいじめんのっ、なんでイカせてくんないのっっ！！」

ただ、これだけ意地悪をしてもなお、俺が寸止めし続ける理由に心当たりのない麻佑もどうかと思う。ここで一言、「俺もやりたいから入れて」と言ってくれたなら、未来は変わるのに。普通にイキたいと言うだけではだめだ。それでは俺が納得できない。

正面から暴れる麻佑の相手をするのが大変になってきたので、俺は麻佑の横に移動した。両手を彼の頭の上でひとまとめにして、空いた手で彼の孔を刺激することにする。しかしここで中に指を入れたとき、確かな違和感があった。

明らかに、緩い。舌で舐めたとはいえ、指より短い舌で慣らしたくらいでは、ここまで奥までほぐれるわけがない。なるほど、彼ときたら悶々の結果、自分で弄ってどうにかしていたというわけか。

「ねえ、麻佑の中えっちなほぐれ方してるよ？ここ、自分で弄って遊んだ？」

「ッ...！！ちがっ、し、したくてしたわけじゃ」

「弄ったのは弄ったんだ」

「ん、なっ...！だって聖智が最近、触ってこないから！」

「だからさみしくて、一人でえっちなことしてたの？」

「〜〜っ、や、も、言うな、言うなよお...！」

浮気の類は疑っていなかったけれど、質問に対して嘘もつけずに頬を染めている麻佑を見る限り、自分で弄っていたのは間違いないらしい。ほら見ろ、お前だって前を擦るだけでは物足りなくなっているんじゃないか、さっさと降参して言っ
てしまえと、俺は麻佑のいいところを指で挟みながら思っていた。

「んは、あゝ、ああ、や、聖智、増やし、て、指、イケない、それじゃイケない...っ！」

「どうかな？乳首も一緒にしたらイケるかもよ？」

「ひううっ！！は、あ、あ———...ッッ！！」

そしてもちろん、イキたいと嘆く麻佑をイカせるつもりはない。彼が中でイケるように開発したのはこの俺で、どうすればイクかも当然分かっている。だから、意識的に手加減する。絶妙にイケない刺激で悶えてもらう。

くにり、くにりと優しく前立腺を擦って、甘く押し込む。ふるりと彼の熱が震えて先走りがこぼれたら、かなり感じている証拠だ。彼が好きな動きをしつこく行くと、有無を言わずイカせることができる。なので今日は逆に、いい場所を外して指を動かした。

けれど、彼を常にぎりぎりの状態に持っていくとなると、中だけの刺激では慣れてしまうだろう。となれば、残るは舌での愛撫になる。なのでこちらは、乳首に活用させてもらう。横になった状態で、ねろ、ねろ、と舐めては吸い付くと、ぐぐっと麻佑の身体が弓なりにしなる。

「ふあああ...！！ああう、ん、ひ、ッ、んんあ、は、は、ッ、〜〜
〜っっ！！」

ぎゅうう、と全身を突っ張らせて、どうにか達しようとしている様がいやらしい。それをずっと見ていたい気もするけれど、今日はダメだ。絶頂の兆しを感じたら、指を抜いて口を離す。そして耳を唇でなぞりながら、孔の入り口をつついて遊ぶ。

「残念。またイケなかったね」

「ふ、ぐ、ッ、くううっっ...！！や、だ、なんで、なんで今日は、こんな...
！」

「さあ、なんでだろうね。麻佑も考えてみて」

「かっ、考えるって、そんなのお前の気まぐれじゃ」

「ん〜、不正解とは言えないけど、ほぼハズレかな。この調子だと何時間かかるやら」

「んはあ、あ、い、嫌だ、ずっとコレすんの、やだっ！」

「いいよ別に、イケるならイッても。麻佑がイケるならの話だけどね」

「ひう、ッ、んんんううっ...！！はあ、あ、ああ、うう、うゝ〜〜っ！！
ん、ッ、や、も、もおやだ、イキたい、イキたいいいっ！」

はふはふ悶えながら、イク手前で止められ続ける麻佑をいじめる。カーペットに濃いシミを残しているのに、出したい液体を出せずに苦しむ熱を何度も撫で上げた。

ー続きは本編にてお楽しみくださいー